随　筆

赤ゲット留学こぼれ話

村　上　信　吾*

今は昔，30年余り前に仏政府給費留学生としてフランスに行った時の思い出話を披露致しましょう。日本はまだ貧しく，外貨不足のために海外渡航は厳しく制限されて，海の彼方の事情は映画や活字で知ることができましたが，外国がまだ別天地のように思われていた時代のことです。

ストラスブールで暮らす

昭和31年，1956年の晩秋，神戸港からフランス貨客船に乗船，１カ月の旅のはずが，ちょうど勃発したスエズ動乱により，船は紅海の途中で折り返して南アフリカ喜望峰を回って，50日目にマルセイユに到着しました。そこから汽車でパリ経由，目的地のストラスブールに着いたのは，12月の初めです。学生寮の広くて，スチームで暖められた一室に落ち着いた時には，ほっとして「遥けくも来たりしものかな」との感慨にふけりました。しかし，それも束の間，翌日からは，たちまち心細い日々が始まったのです。どんよりとした空の下，冬至間近く午後４時頃には日が沈み朝はなかなか明るくならず，外は石造りの建物の並んだ寒々とした風景で，その中に一歩出れば言葉が思うように話せません。この時ここに居た日本人は計５人，それぞれが懸命に外国生活を過ごしていたと思います。よくベトナム人に間違えられました。

ストラスブールはパリの真東400キロ，西ドイツとの国境のライン河沿いにあり，当時人口20万，アルザス地方の中心にある中世からの商業都市です。ご承知のように，アルザスはロレーヌと共に独仏間の領土争いの対象となった地方です。ドーデが「最後の授業」を書いた独仏戦争の前に生まれて，以来，国籍が４度も変わったというお婆さんも居りました。第二次大戦の間，ヒトラーによってここはドイツ領とされたのです。この戦争には，この地の青年達はドイツ兵として徴発され，東部独ソ戦線に送られて多くが犠牲者となったといいます。土地の人々はお互いにはアルザシアンというドイツ系の言葉を話し，フランス語は公用語というわけです。日本を出る前には，こんなことは全く知らなかったのですが，こういう土地柄のためでしょう，ここの人々は外国人にはことに親切なようで，春を迎える頃には，私は何時の間にかこの町に馴染んでいました。１年もすれば日本人が珍しいと近づいてくる人等，いろんな友達や知人ができて，こうした人達と楽しい時を過ごす機会にも恵まれ，ストラスブールも住めば都となりました。

私はここの大学で約２年間数学の研究に従事しましたが，数学教室ではお二人の老教授の他は，パリから来た30代の働き盛りの教授・助教授の数名からなり，これら若い連中が活発に研究を進めていました。後にカタストロフィーの理論で日本でも有名になったトムもその一人ですし，私の指導教授であったコシュル，その他マルグランジュ，ベルジェなどいずれも今や世界の数学界のボスとなっています。「栴檀は双葉より芳し」と言うとおり，この当時からこの人達は専門の分野ではすでに令名を馳せていました。毎週２回皆が集まって，セミナー形式で予め決めたテーマについて話す研修会が行われました。幸いなことに私にも馴染み深い話題が多く，私はなんとかここに混って２年間勉強することができました。こうして数学も学びましたが，それよりもこの人達の数学に対する考え方，近づき方にたいへん感銘を受けて，このことはその後今に至るまで折に触れて思い出して

*村上信吾（Shingo MURAKAMI），大阪大学理学部数学科，教授，理学博士，幾何学

います。一人一人は自ら頼むところあり，数学の世界を力強く開拓していましたし，一緒に勉強をするときには，数学を共に楽しもうとするように分かりやすく熱心に話し，その巧みな演出力には感心しました。詳しいことは自分で研究するという前提があるのでしょう，何が重要かを大局的に議論して瑣末にこだわらず，こういう点は日本ではかなり対照的なのですが，数学の研究を進める上には大事なことだと思います。

毎日の生活では驚くこと多く，フランス人がよくしゃべるのにはたまげるのみで「言霊の賑わう国」というのはこちらが本家だ，「沈黙は金」という諺が生まれるのはもっともだと悟りました。その他にも，若い男女が人前で平気でキスしたり，教授が教室の机に腰掛けて話したりするのを見ても，孔孟の教えを受けて育った私には思いもよらぬことで，当初は本当にびっくりしました。

K君のこと，ある宗教論議

いつ頃から知り合ったのか覚えていませんが，同じ学生寮にK君という学生が居ました。両親はポーランドから亡命してきてパリにいるとのことでしたが，生まれ故郷は今はソ連領に併合されたポーランドの町だそうです。彼はその頃フランスで流行していた切手の収集に凝り，これが私に近寄ってきたきっかけであったかもしれません。しかし，仲良くなってからは，なかなか親切で頼りになる男であり，23歳とは思えないほど思慮深く話題が豊富なので，よく駄べっていました。ストラスブールのオペラ座に「アイーダ」が来たから，一緒に観に行こうと切符の購入も引き受けて誘ってくれたので，これに出かけた時のことです。日頃の彼からは想像もできないりゅうとした姿で現われ，普段着姿の私を見てたしなめたのには驚きました。ヨーロッパならではのことでしょう。また，ポーランド料理だといって牛の胃袋のバター炒めを手作りで御馳走してくれたこともありました。いまはアルザスの田舎の高校の数学教師におさまっていますが，きっと良い先生になっていることでしょう。

さて，このK君は東洋にも興味を持っていて日本のこともよく尋ねましたが，ある日のこと，論語を翻訳で読んだばかりだと言い「親の言うことはなんでも聴け」というのは納得できないが，儒教は立派な宗教だと盛んに称えます。論語ならばこちらは中学時代にたたきこまれて承知していますし，そこでは「子曰，怪力乱神を語らず」という文言に代表されるとおり現世の道理が教えられ，神の世界を避けています。このことを言って「儒教は宗教ではない，それが宗教ならば唯物論のコミュニズムだって宗教になるだろう」と反論しました。すると，彼は突然むきになって丁々としゃべりだします。「君は知っているかい，ソ連軍がポーランドにやってきた時，どんなことをしたか……，コミュニズムなんて決して宗教ではない，これに対して儒教は立派な人の道を説いているじゃないか」と。儒教が宗教かどうかは別として，この時私はK君の古傷に触れたようで，ソ連兵の暴行とコミュニズムの学説とは関係ないんじゃない，と言うのをとうとう控えてしまいました。

またある時，K君は自分は神を信じないと言い，その理由をくだくだと述べたこともありました。その内容は忘れましたが，初めから神様がいないのか，あるいは八百万もいらしゃって一々相手をしていられない故か，日本ではこのように理屈をつけた無神論は聞いたことがありません。「それでもぼくは，観光客がよくしているように，教会で信者のお祈りを妨げるようなことはしないよ」と付け加えたのも印象に残っています。ストラスブールには有名な大伽藍があって，観光の名所となっています。

フランス語 etc.

ストラスブールでの初めの数カ月はフランス語の表現を覚えるのに精一杯でした。旧制高校ではドイツ語を習い，フランス語は大学3年の時に数学書を読む必要に迫られて，関西日仏学館で夏期速成講習を受けたのが最初で，その後数学の仏文の論文に接したり，また小人数でフランスの短篇小説を学んだりはしましたが，フランス語の会話や実生活での使い方は勉強したことが無いのですから，こうなったのは当然

でしょう。幸い数学に関する限り，単純な単語と慣用句の繰り返しですので，さほど困りませんでしたが，数学ばかりで暮らすわけには行かず，毎日新しい単語や言い回しを覚えるのに勉めました。何とか誰とでも最小限の会話が楽しめるようになったのは，1年目の終わりの夏休み数週間をストラスブールでただ一人の日本人として過ごしてから後のことでした。

日本語の50音のほとんどの発音がフランス語で意味を持つと発見した人がいますが，そう言えばフランス語では短い表現が多いことを面白く思ったものです。例えば，サ・ヴァ（元気かい），サ・イ・エ（終了）等々。フランス語に母音が多くて，これらをつい日本語式に発音すると通じないのにも悩まされます。学生達と一緒に暮らしたお陰で，彼らから遠慮無しに発音の誤りを正してもらったのは有難いことでした。また，フランスでは既婚，未婚の女性をマダム，マドモアゼルと区別しますが，後に町中に下宿した時，そこの年老いた女主人を大きな声でマドモアゼルと呼ばなければならないのには内心閉口しました。判別しにくい年頃のご婦人の場合にはどう呼んだものか，と困っていたら，ある友人がニヤリとして，どう間違っても相手は喜んでくれるさ，と教えてくれたので安心しました。

フランス生活半年くらいの頃，同じ町に滞在の仏文のYさんから偶然に，フランス語の会話にはド・サン＝テグジュペリ作「小さな王子(Le Petit Prince)」が良いよ，と勧められました。この本は日本では「星の王子さま」という題で訳されていて，ご存じの方も多いと思います。早速，本屋で手に入れて辞書を片手にその平明な文章を追ううちに，フランス語が急に身近くなったように感じ，そしてその幻想的なお話にも惹かれて一気に読みました。この作品では砂漠に不時着したパイロットと星から来た小さな王子の間の会話を始め短い会話がたえず現われますが，その中にはそのまま日常に使える言い回しがたくさんあります。繰り返し読んで暗記したこれらの会話文は，その後の実生活にずいぶん役に立ちました。

この「小さな王子」に書かれている世界は，私がそれまでに接したフランス文学の作品とは全く異質なものでした。それほどは読んでいませんが，フランス文学と言えば良かれ悪しかれ人間の心の葛藤を描いた大人の作品である，と思い込んでいました。ところが，「小さな王子」では童話のようなスタイルにこと寄せて作者が自己の人生観，価値観を強烈に主張しています。フランスでこの作品はやはり大人の読む哲学的な文学として認められていますが，日本の社会ではこの作者の考え方は小児的なものとしか見られていないようです。残念なことですが，我が国では権威ある出版社がこの本の邦訳書を少年文庫の一冊として扱っているという事実が，期せずしてこのことを物語っていると思います。

そして今

そして今、もう30年が経ちました。ついこの間のことのように思いますが，歳月は人を待たず，あっという間に過ぎています。この間に，時代は大きく変わりました。日本から空路一日でパリへ直行できます。そこへ行かなくても，テレビ等がたえずフランスの実情を目前のことのように紹介していますし，チーズやワインも居ながらにして味わえます。もう私の過ごしたような赤ゲット（「不慣れな洋行者」―広辞苑による）留学をする日本人はいないでしょう。若い人が外国旅行から帰って，どこのレストランが美味しかったとか，どこそこは汚くて参ったといった他愛のない話をしているのを聞くと，今昔の感にたえず，微笑ましい限りです。でも，正直なところを言えば，こうして30年前と比べて日本の若者のフランスへの理解は深まったのかどうか，巷には外国製品が溢れ，日本人の対外的自信が回復するにつれて，かえって西欧文化の多様性や奥深さが見え難くなっているのではないか，との不安も感じるのです。こう案じるのは，私の思い過ごしでしょうか。

フランス人達と付き合いを濃くするほど「東は東，西は西」の思いに駆られます。そうならばこそなお，国際化する我が国の将来のために，日本人がフランスほか諸外国の人々と相互理解を深めることを願い，我が国と諸外国との間の文化交流が発展することを祈っています。